



貴重な消化管病変が、典型例から比較的まれなケースまで網羅

胃と腸アトラスI 上部消化管 第3版

「胃と腸」編集委員会 編

蔵原 晃一, 長浜 隆司, 小田 丈二,

竹内 学, 八尾 隆史, 海崎 泰治, 二村 聡 編集委員

昭和医科大学江東豊洲病院消化器センターセンター長/特任教授

井上 晴洋

このたび書評の機会をいただき、改めて『胃と腸アトラスI 上部消化管 第3版』を拝読した。貴重な消化管病変が、典型例から比較的まれなケースまで網羅されている。各症例の内視鏡像は鮮明であり、また病理の写真との対比も素晴らしい。多くは1〜2ページとコンパクトにまとめられた症例提示を通して、上部消化管疾患を効率よく学ぶことができ、内視鏡医・消化器医にとって、まさしくバイブルとなる書籍である。評者が申し上げるまでもなく、本アトラスは、早期胃癌研究会を母体として創刊された「胃と腸」誌の集大成である。編集委員の先生方、また執筆された先生方の熱意とご尽力に感謝と敬意を表したい。咽頭、食道、胃、十二指腸と、いわゆる上部消化管内視鏡が視る領域がこの一冊に網羅されている。

評者自身、欧米そしてアジアの内視鏡系の学会やライブデモに参加する機会がしばしばあるが、内視鏡写真を提示されて、その診断や治療法選択の相談を受ける。その際に強く感じるのは、海外の内視鏡医からの日本の内視鏡医に対する敬意である。そこにはEMR、ESD、POEMなどの治療内視鏡に対する評価もあろうが、何といっても日本がそのほとんどを作り上げた消化管の早期がん診断学への高い評価であろう。早期胃癌、早期大腸癌、早期食道癌などに代表される内視鏡診断学は、早期胃癌研究会で提示される症例を通して内視鏡所見と病理所見を徹底的に対比検討することから創り上げられてきた。それは、症例検討を内視鏡医と病理医が共同して妥協なく行うことに立脚している。日本の内視鏡医の場合は、若いころから早期胃癌研究会や胃と腸大会などを通して、内視鏡所見と病理所見を徹底して詰めることが当たり前となっている。これがこの領域で日本の内視鏡医が海外の内視鏡医を圧倒している理由である。この観点からも消化管病理の先生方のご指導・ご協力に改めて感謝を申し上げたい。診断学は、体系的に理解されなければならないが、そのためには個々の症例を通して地道な作業の積み重ねが必要である。先達がまとめた本アトラスの内容を若い内視鏡医、また消化器医が学び、頭の中に叩き込むことで、内視鏡診断能力は大幅に向上すると確信する。個人の購買はもちろんであるが、医局や図書館に必須の本であると思う。本アトラスが、日本の消化器内視鏡診断のさらなる発展に寄与することを確信する。

●医学書院 刊 A4 頁420 2025年10月

定価:19,800円(本体18,000円+税10%)

ISBN 978-4-260-05432-4